

南方

南方勤務と八・一五の思い出

東京都 茂木 宏

人間は、いつでもどこで、どんなことに巡り合うのかは、全く神のみぞ知ることであるといえよう。

私は、昭和十六（一九四一）年四月四日午後四時、神戸港出帆の大阪商船株式会社定期貨客船「バンコク丸」に乗船していた。大阪に本社が所在する貿易商社の社員として、しかも入社後まだ四年目の若輩の身でありながら、社長の委任状を持つての渡航であった。仕事は、タイ国の首都バンコクに、新しい出張所を開設する準備のためであった。

下関、基隆、海口、ハイフォン、ハノイ等を経由して、四月二十二日に、ようやくのことでバンコク港に入港して待望の上陸を果たし、N出張員に迎えられて社宅に落ち着くことができた。

N出張員は、原塩を運んできたイタリアの貨物船がマレー半島沿いのサムイ島で座礁したために、この原塩積み替えの打ち合わせなどの仕事のために数カ月前から当地に出張中であつた。

社宅はタイランド・ホテルにも程近く、閑静な場所であり、近くにはドイツ領事館もあつた。

二十四歳の若輩が、社長の委任状を持つて我が国の大使館やその他の国の出先機関、また、タイ国側の関係諸官庁などを駆け回って、正式に出張所開設の認可を取得することができた。

メナムのチャオプラヤ河畔にあった、ウインザービルの一室も借りることができた。少し大き過ぎるかなと思われるほど、立派な事務所を開設した。

出張所としてのかっこうも整い、仕事も軌道に乗ってきた一カ月そこそここのころ、所長が赴任して来られた。各種の使用人も雇い入れて、出張所としての体制が整備されたのは、おおむね一カ月半ぐらいたってからであった。

そのころ、少なからず驚いたことには、歴然とした独立国家であるタイ国の首都バンコクで、在留邦人の男子が日曜日には、在郷軍人会の指示によって、市内のルムピニー公園などの広大な広場で軍事教練を受けていることであつた。私は、心中で意外な感にうたれていた。

时期的にも、東南アジア地区は乾期の最中であり、その炎天下での猛特訓であつて、日射病にかかつて突然に卒倒する人も出たりしていた。私は幸いに何とか耐えて、行軍にも参加していた。

同盟関係にある国とはいいながら、他人様の国の首

都で、他国の在郷軍人が白昼堂々と教練をしたり行軍をしたりしていることには疑念を抱き、忸怩たるものを感じたものだった。こんなことは、今だから言えることであらう。

出張所開設当時に雇い入れたボーイに、ウタイ・オームネという日本人との混血の青年がいたが、誠に温和で従順な性格の好青年で、社員のみんなからかわいがられていた。

私たち社員、といつても所長以下全員で三人であつたが、週三回の割合で退社後社宅のベランダで、初歩のタイ語の習得に励んでいた。先生として迎えたのがオームネ先生で、事務所のボーイとして雇われていたウタイ青年の姉さんであつた。

後日の話、このオームネ先生が終戦後、バンコク日本文小学校の某先生と結婚して日本に引き揚げ、その後、タイ語の教師として東京でしばらくの間、教鞭を執られていたということを知り、世間、否、世界は広くて狭いものだと、つくづく感じたことがあつた。

いずれにしても、ほんの片言ぐらいいしかタイ語の読

み書きはできなかった。

そんなころに、忘れることのできない昭和十六年十二月八日を迎えた。日本は米・英・蘭に対して宣戦布告をして太平洋戦争の幕が切つて落とされた。

開戦当日の未明、既に南部仏印のタイ国国境まで進出していた日本陸軍は、一斉にタイ国領内に進駐を開始した。実際のところ十二月七日の夜半から八日の払暁にかけて、在留邦人たちは自家用車を運転して、日本軍の兵員を国境からバンコク市内へ何回かにわたつて輸送し、微力ながら戦争遂行への協力をしていた。

翌九日の朝には、バンコクの競馬場は日本軍でいっぱいになっていた。米・英・蘭の各大使館の玄関前には、剣着き鉄砲の日本兵が歩哨に立つようになった。

米・英・蘭の大使たち主だった外交官は、今日、このことあるを予期していたのか、八日以前にそれぞれの本国に向かって退避していたとのことであった。

そして日本軍第十五軍司令部は、市内のチュラロンコーン大学の校舎に入り開設された。このときの第十五軍司令官は飯田祥二郎中将であったが、この将軍

は、後にビルマ方面軍の編成時には牟田口廉也中将と交代になり、あの無謀だったインパール進攻作戦にはかわらなかつた。

私が通訳として勤務していたある日、訓練で行軍した際の休憩中に飯田中将とたまたま擦れ違い、目礼をもって敬意を表したが、それに対して飯田中将は丁寧なる目礼を返された。そのとき飯田中将は、上衣なしのくつろいだ姿での散歩中とお見受けしたが、無名の一徴用者である若僧の私に対しても平等に答礼をされた。将軍でありながらも下の者に対しても、何と礼儀に厚い方かと敬服したことを思い出す。

私は在郷軍人会の指示により、軍司令部に出頭することを命ぜられたが、そこで思いもかけずに、「現地徴用通訳（タイ語・英語・ビルマ語）を命ずる。」という辞令を受け取った。

これには少なからず驚いた。バンコクに着任してまだ八カ月そこそこの私は、今、タイ国の小学生用の教科書を用いて、オームネ先生について初歩のタイ語を勉強中であり、軍の通訳ができる能力などは全く無

く、どうしてよいか言葉もなかった。いわんやビルマ語にいたっては、今まで口にしたことはもとより聞いたことさえもなかった言語であったので、その辞令を見て、何とも言えぬ不安感に襲われた。

しかし、事態がここに到っては、今更、弱音を吐くこともならず、いかんともならぬと覚悟を決め、必要最小限の身の回り品を持って軍司令部の副官部に着任し、副官部付の通訳となった。今まで全く軍隊には掛かり合ひのない町人であった私も、兵隊さんと一緒になって点呼に整列したり、ときにはトラックに便乗して演習にも出たりして、だんだんと生活環境にも慣れて軍隊生活にも違和感を感じなくなっていた。

ある日のこと、演習場に着いてトラックから降りようとしたときに、不覚にもトラックの荷台から転落して、左肩を強打してひどい痛みを感じた。そのときに一緒にいたT兵長がすぐに応急処置をしてくれたので、意外にも早く回復したことは今でもなお忘れることのできないことである。この恩人のT兵長は、後日、ビルマ街道を北上しているときに、攔座していた

英軍の戦車の脇を乗車していたトラックがすれすれに擦れ違った際、不覚にも両足を挟まれて出血多量の重傷を負い、後日、惜しくも命を失ったとのことで、何とも悲しいことであった。

昭和十七年一月の中ごろから末にかけてのこと。司令部要員と共にバンコク駅を列車で出発、ピッサヌロークまで行き、そこからタイ・ビルマ国境のジャングル地帯のメラマオからメソートまで行軍をした。ベックの山越えと言われているが、それはそれは大変に難渋した行軍であった。ジャングルの中の夜営など、この瘦身瘦軀の私がよく耐えられたものとわれないが感心している。ひたすら歩きに歩き続けて、文字通り従軍できたことは、それからの私に強い自信を植え付けてくれた。

この山越えが幾日かかったのか今日では全く記憶に残っていないが、途中で不覚にも Deng 熱にかかり高熱に悩まされ続け、あわや、このジャングルで一生を終えるのかと覚悟を決めていた。馬の尻にでも刺すような太い注射針で注射してくれた、年配の衛生兵の

手厚い看護のおかげで、一命を取り止めて行軍を続けることができた。この衛生兵は私の命の恩人であり、今でも心からの感謝を捧げている。

ジャングル内では、軍馬が次々と病死していった。

腹部が異常に膨張していて、その死体は山中に遺棄したままで前進した。誠に痛ましく思うとともに申し訳ない気持ちにもなる。ただ、その死臭は鼻につく強烈なもので、いまだにその悪臭は忘れられない。

私はまだ完全に回復していなかったが、行軍は続いていた。私の弱っている姿をみて馬を用意するから乗馬で行軍しないかと言われたが、残念ながら私は短足なので、馬に乗ることは困難であったので、その旨を申し出たところ、H軍曹の運転する側車（サイドカー）に便乗してよろしいとの、温情あふれる取り計らいを受けた。それからの行軍は順調で、何とか無事に山越えをすることができた。

モールメン・マルタバン・シッターン・ペグーなどを経て、ビルマ国の首都ラングーンになんとか到着した。

ラングーン大学に置かれた軍司令部に着いた直後の、昭和十七年四月二十九日の天長の佳節には、杉山参謀総長が司令部を訪問されて、戦勝記念として、「恩賜の煙草」を拝受した。

私は残念ながら煙草を吸わないので、東京にいる叔父あてに手紙と共に送ったが、無事に手元に届いたかどうかは分からなかった。そのころはまだ、ラングーン市内は戦火が収まらず、市内の至る所で火の手があがっていた。

長く続いたジャングル地帯の山越え、その中の起居生活などにも、どうか耐えて、何とか生きて目的地のラングーン市内に着き、やっと静かな生活になった。体の方もどうか快方に向かっており、気持ちにも落ち着きをみせてきた。

ビクトリア湖という人造湖に飛び込み、長かった行軍中の砂塵にまみれた身体を洗い、やっと生き返った気持ちになった。そのときのそう快きは、従軍期間中を通じて最高の思いであった。

軍司令部付の従軍通訳という名の如く、正しく軍に

従って歩きに歩いたのみで、通訳という本職ではあまり役に立っていなかったのではないかと反省するばかりだった。

副官部で私と一緒に起居していて、「飯上げ」までしてくれたY上等兵と二人で、ある日公用で近くの村落に行ったときのこと。その村の村長に、「明日、五十頭の軍馬が到着するので、それに見合う馬繫場を用意してもらいたい」ということを交渉したが、通訳でありながらビルマ語は全然話せない私は、英語でしか通じないと思い、つたない英語で交渉を始めたが、村長は、極めて流ちょうな英語で話し合いに応じてくれたので大変にありがたかった。

この村長は、一見日本のそれとよく似た^{ちよまけ}丁髷のよう^{うよう}に髪を結っていたので親近感を得た。私も幼稚な英語で何とか話しが通じたので、大変に嬉しく、また、自信が出てきた。

一応、所期の目的を達成したので、帰りはY上等兵と二人で意気揚々と帰隊した。

しかし、誠に悲しいことに、意思の通じ合った寝台

戦友の紅顔のY上等兵は、ある任務につくために出発準備を整えていたときに、彼自身の手榴弾の安全弁がなぜか外れて落ち、手榴弾が爆発するという不測の事故が発生し、若い生命を失ってしまったこのことを後日になって聞いた。心から冥福を祈るものである。

しばらく休養してから、更に前進することになった。ラングーンからベグー・トングー・ピンマナ・サジを経て、ビルマ街道を一路北上し、古都マンダレーの城内に既に進出していたビルマ方面軍司令部に到着した。

文字通り、軍に従ってビルマ街道を北上した、「員数」の如き現地徴用通訳は、部隊の皆さんにはお世話をかけるだけで大変な荷物であったことと、今になっても内心忸怩たるものがある。

マンダレーに到着後すぐに、私は軍司令部副官部付通訳から、マンダレー城内にある貨物廠の通訳として転属となった。

ある日、物資宰領のために、灼熱の古都マンダレーと、冷涼の景勝地として知られているメイミョ（日本

軍は、明妙と言っていた)の間を、宰領官のW中尉と私は押収した乗用車の「ナッシュ」に乗り、兵隊を乗せたトラックと一緒に往復したことがあった。

任務を無事に終えて、マンダレーの本廠に戻る途中の山腹道の全く死角に近い曲がり角で、メイミョの方向に向かって進んでいた佐官旗を翻した乗用車と、出合い頭に接触してしまった。その瞬間に、運転していたW中尉はハンドルを大きく左に切り、車を左側の崖の大きな岩面にぶつけて止まった。正面衝突はW中尉の機転で辛うじて避けることができて、九死に一生を得ることができた。

激突の一瞬、天地が逆転した。車のタンクからはガソリンが漏れ出してきたが、私もW中尉も、しばらくの間は逆転した車の中で一時的に意識を失っていた。そのうちに意識が戻り、事態を冷静に見守ることができた。車内に火種は無かったので、引火爆発の恐れは無いので、慌てることなくそこから逃れた。二人共にかすり傷一つ無かったことは、不幸中の幸いであった。

直ちに後続の兵隊が、逆転している車にロープを掛けて引き起こしてくれたので、再びその車に乗って戻ることができた。良い車(ナッシュ)は多少の事故にあっても故障もしないことを知った。

私は、インパール作戦が開始される前に、現地徴用通訳の役目を解除されて、修復開通後の最初の列車に便乗してラングーンに戻った。確かこの列車には、ウー・パーモ首相の一家が、やはりラングーンに向かうべく乗車していたとのことを後に聞いた。

帰心矢の如くに、一路最終目的地のバンコクの社宅に帰ること夢みて、まずはラングーン支店に行った。

しかし、そこには私の意に反した、バンコク支店長からの指示がきていた。「内地からの補充人員がラングーン支店に着任するまでの間、ラングーン支店勤務のこと。追って指示するまでバンコクに帰るに及ばず」という指示であった。

そこで、それから約半年の間、ラングーン支店で勤務し、内地から来るであろう増員社員の到着に備えて、事務所の拡充整備に努めていた。

人の縁とはまさに異なるものである。ある日、マンダレーで一緒に勤務し、お互い九死に一生を得た経験を有するW中尉が訪ねてきた。よく捜し当てたものと感謝すると共に嬉しかった。「茂木君に是非、会いたくってきた」とのことであった。久し振りの再会に中尉の武運長久を祝したところ、中尉は、「自分は、これよりレイテ島に転進します」とのことであった。転属のための別れのあいさつにわざわざきてくれたのだった。

快男児W中尉のそれからの消息は、今になっても全然分からない。学徒出身者とみたが、司令部勤務中、時々、抜刀して辺りの樹木に切りつけたりしていた血気盛んな青年将校であった。

後年、私は長野県上田市にある「無言館」並びに「信濃デッサン館」を訪れ、学徒出身の若者たちが残した絵画や、戦地から家郷への便りなどを拝見したが、これらの遺品を見ながらW中尉のことを思い出したものである。

私の体験したビルマ戦線は、戦史からみても非常に

悲惨な戦いであり、三年七カ月に及ぶ戦陣にて二十万余の尊い人命を失った戦いであった。靖国神社や千鳥ヶ淵墓苑に参拝するたびにみる戦跡地図を眺め、タイ・ビルマのあの筆舌につくし得ない苦勞を思い出すのである。

ラングーン支店勤務も半年がたったところに、内地から補充要員が着任した。そしてラングーン支店での臨時勤務の任を解かれて、バンコクにやっと戻れることとなり、昭和十八年の初頭、ミンガラドン空港からバンコクに向かって飛び立ったときは、あたかも我が家に帰れるような嬉しさが体全体に満ちていた。

懐かしのバンコク勤務もあまり長いことなく、翌年（昭和十九年）七月中旬に、広東支店へ転勤を命ぜられた。バンコクから軍用列車に乗り、ブノンペンに向かい、更にブノンペンからは軍用機でサイゴンへ、サイゴンで広東行き軍用機に便乗できるまでの間、サイゴン支店で短期間世話になった。

昭和十九年十一月九日、ようやく広東行きに便乗の許可がおりて広東に着任した。

時局はだんだんと切迫してきた。広東在勤中はそれまでの生活と異なり、連日連夜、戦の中にいるような状況になった。仕事の方はほとんど連日、勤勞奉仕に動員されて空港補修作業に従事した。また、月明の夜には桂林・昆明から飛び立った米軍機による空襲があった。空襲警報が解除されるまでは、社員寮の地下室に避難しているほか打つ手がなかった。

広東でも、商社の役目は専ら軍のために物資を調達することが、仕事のほとんどであった。私は、昭和二十年五月ごろからマカオ出張を命ぜられて赴任した。マカオにある代理店の協力を得て、ある軍需物資を買い付けて、広東に向けて積み出す仕事为主であった。予定どおりの物資を買い、それを集荷し船にて積み出し、無事に広東支店が受け取るまでは随分と気の張る仕事であった。

しかし、広東支店から予定どおりの物を無事に受け取ったという連絡が入るとほっとして「美国飯店」という名のレストランで、独りでビールの祝盃をあげていた。

このころになると、外出先は領事館とか武官室などが主であったが、宿舎であった「国際酒店（グランド・ホテル）」から出るときにはサーチャオという黒い絹の中国服を着用していたが、何となく何者かに尾行されているような懸念を常に抱いていた。

忘れもせぬ、昭和二十年八月十五日の朝、マカオ領事館員の羅兆麟さん（ベンコク、広東以来の好朋友）から電話が入り、天皇陛下自らマイクの前に立たれての重大放送があるので、直ちに來館されるようにとのことであった。何であろうかと訝りつつ、早速に取る物も取りあえずに力車を走らせて領事館に行った。

ここで、大東亜戦争の終結について玉音を拝聴した。来るべき事態がついに来たのだ。いつかはこうなるであろうということは薄々と感じていたが、悲劇が事実となってしまう。虚脱感のまま領事館を出てホテルに戻ったが、途中ではもう中国群衆が爆竹を鳴らして口々に「和平再来、和平再来」と喚声をあげていた。

ホテルに戻り部屋に入ろうとしたら、一枚の紙片が

差し込まれていた。「茂木先生、当分の間は外出をしないように」と書いてあった。商社代理店のCさんからの忠告であった。以後、この忠告に従って行動を自粛した。食事も自分の室に運んでもらい、外出も、どうしても必要なとき以外は控えていたが、いざどこにも出られぬとなると、誠にづらいことであった。

代理店主のCさんとの間における商売上の清算も早急に行った。

羅さんやCさんの勧告もあり、どうかして速やかに広東に帰任することを考えた。

終戦以後二週間ぐらいは、広東向けの便船はほとんど欠航していても動きがとれなかった。

ある日、食事を部屋に運んでくれていた部屋付のボーイが、「茂木先生、戦争が終わってとても嬉しい。先生も私たち中国人も、皮膚を切れば同じ赤い血が出るよ！」と言ったときには、心の底までどきどきとした衝撃が走った。なぜ、人類は絶えず戦いを繰り返す、同色同種の人間すら殺し合ってきたのかと真剣に考えさせられたことだった。

終戦の日、このホテルに宿泊していた日本人は私だけであった。

Cさんの親身の協力により、私は汕頭人の陳榮という偽名を名乗って船票を求めて、九月二日の夕刻に出帆することになった船に乗船することができた。この船は、終戦後初めて広州に向かって運航する一般乗客船である。この船に乗れたことについては、今でもCさんに感謝している。

九月三日の朝早く、広州の港に着いた。上陸して真っ先に駆け込んだところは、「東天紅」という名の飲茶屋で、ここでまず腹ごしらえをしてから、広州長堤大馬路にあった広東支店に無事に帰任した。

船中で、次のようなことがあった。夜半に尿意をもよおし、船尾に一カ所しかない便所（便所と云っても、他人からはほとんど丸見えのところ）で、私は中国服のズボンをまくし上げて小用を足したが、だれか私のこの放尿姿勢を見たのであろうか、席に戻ったところ、周りから、「あいつは日本鬼（ヤブンクワイ）だぞ！」という声が耳に入ってきた。日本鬼とは、文

字どおり鬼の日本人という意味だ。一瞬、不気味な恐怖心が心のうちを走ったが、努めて冷静さを保っていた。

中国の男性は、小用のときでも座って用を足すようで、私の立ち姿を見れば、あいつはおかしいぞ、日本人ではないかと、すぐにばれてしまったのである。

Cさんからも乗船前に、船中では一切無言で過ごすようにとの忠告があったので、それを守って一晩を過ごしていた。幸に船内で暴行を受けることなど無く、無事に広東に戻れたことは感謝のほかは無い。

広東支店に戻ったが、休む暇もなく閉店業務に忙殺された。現地雇用の中国人などには帰郷手当を金塊で支給し、無事に、そして一日も早く郷里に帰るように話して、涙ながらに決別を告げた。雇人の人々は、皆、善良な気持ちのよい好朋友であった。

昭和二十年九月十二日午後四時、私たちは、宿舍があった沙面シャメンの広場に集合を命ぜられ、最小限の身の回り品を持って、トラックで黄埔の「日俘集中營」という名の収容所に送り込まれた。広州市内に在住の邦

人約一万人もの人々も一緒に収容された。以来、約九カ月余りにわたっての、完全な日本人村としての集中營生活の始まりとなった。

食糧難と病氣との闘いで、避難者の日常生活は苦難に満ちたものになった。

あるときは、珠江の河口方面に黒煙を見たという情報が入り、引揚船が到着したのだという噂が飛び交った。すぐに単なる誤報ということが分かったが、避難者の中には、落胆のあまり精神に異常をきたした人もいた。

乳幼児を抱えた母親や、老齢の方々の中には、栄養失調で命を失う人々も多数出てきた。悲痛な思い出は今日に至るも脳裏から消え去らない。引揚げ直前に、集中營で不帰の客となられた同胞の魂に対し、安らかなれと心から祈念するや切なるものがある。

やがて、待望の引揚船が入港した。約一万人の避難者は、二隻の船で故国に向かった。体よりも大きい荷物を背負って、老人・子供の手を引っ張ってタラップを上る父親の姿には悲哀を感じ、痛ましいものであつ

た。

私は、軍の命令で南支那方面に展開している日本兵の引揚げ促進のために、日米両軍担当者間の連絡要員として残留させられた。

黄埔の埠頭でみんなと別れを告げた。

通訳として活動していたある日、連絡のために珠江河口に停泊中の米フリゲート艦に乗艦したが、このとき会話を交わした米軍のW中佐が、私に次のような質問をした。「我々米軍将校は中国行きと決まると、すぐに初歩中国語を勉強して赴任するが、日本軍の将校はいかがですか？」外国語に対する米軍の対応に感心させられたが、私は、もちろん日本の将校でも同じだと思うと答えた。

南支方面派遣日本軍の内地送還が一応終わってから、広東の軍司令部残務整理要員の将校・下士官の方々と共に引揚船に乗ったが、恐らく広東に配船された最終の引揚船ではなかったかと思う。

第二十八番か第二十九番かはっきりとはしないが、リバティー型の船で、その名は忘れもしない、「サ

ミュエル・T・ダーリング」という輸送船であった。

この船を操船していたのは、日本海軍の若き二人の少尉であった。このうちの一人、八戸市在住のTさんとは不思議な縁で、戦後五十余年を経た今日もお文通を続けている。

航海中、機関室に呼ばれて、機械の英文説明を手伝い、船長室でお茶などを頂いたが、本船の船長の写真が掲げてあり、その名前が「S・M・D A R L I N G」とあり、何とロマンチックな名前だろうと思った記憶が鮮明に残っている。

人と人との出会いとは、まさに天の配慮によるものかと痛感したものである。

この船で浦賀に向かう途中、はるかに海上から眺めた祖国日本の島々は、意外にも何となく寒々とした印象を持った。敗戦の民として、祖国への航海であったからかもしれない。

一日も早く東京へ、と帰心矢の如き気持ちで浦賀に入港したのは、昭和二十一年五月三日であった。浦賀港に入って驚いたことには、私たちよりも先に黄埔を

出帆した引揚船が、二十数隻も港内に停泊しているではないか。聞いたところでは、疑似コロナ患者が発生したので、海上封鎖の状態となり、検査の結果が出ないと上陸許可にならずに足留めされているのであった。

かくして、海上封鎖で二週間、さらに上陸後二週間引揚援護所に強制收容され、防疫上の諸検査を受けた後、ようやく無罪放免になって、懐かしい東京に戻れたのは五月二十九日であった。

顧みるに、二十四歳から二十九歳までの間、タイ・ビルマ・広東・マカオなどの各地での勤務を終えて、五年振りに引き揚げる事ができたことを、天に向かつて心から感謝を捧げる次第である。そのうえに、勤務先も幸いにして残存していたので、昭和二十一年六月四日から五年振りに元の職場に帰任できたことは、誠に有り難いことと感謝するほかない。

戦後、既に五十余年、まさしく時は光陰矢の如くに流れ去ってしまった。今日の世界、そして日本の諸般の情勢を静かに考えるときに、人類は二度と戦争とい

う悪行を繰り返すことなく、真の平和のもとに、許された歳月を感謝しつつ生きていきたいと念ずるや、誠に切なるものがある。

マライにおける終戦前後の苦闘

神奈川県 佐々木 輝 久

一 マライ移住の動機

私は、昭和十八（一九四三）年七月十一日をもって陸軍のマライ軍政監部付を命ぜられた。職務はマライ地区における文教行政に任ずることであった。（戦時中、日本はマレーをマライと公称していたので、固有名詞についてはマライと記述する）

昭和十八年八月三十一日、輸送船で九州の門司港を出港した。当時、日本軍の南方戦線における戦況は、緒戦の戦果の勢いがまだまだ残っていて大きな変化もなく、日本近海の制海・制空権は我が方にあったので、台湾、ベトナム、サイゴンなどを經由して航海を